



Title	分節音とアクセント(4) : 岡山方言の分析から
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 70(1), p. 19-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

分 節 音 と ア ク セ ン ト (4)

—岡山方言の分析から—

角 道 正 佳

Segment and Accent (4)

—Analysis of Okayama Dialect—

Masayoshi KAKUDO

The topics dealt in this paper are:

2.3.6.10 Accent of the Verb stem+Negation marker+Conjugational ending

2.3.7 Stem vowel alternation of irregular verbs *kuru*, *suru*, *juu*

2.3.8 Accent of Verb+Particle

2.4 Boundaries

In 2.3.6.10, I showed that the accent of the negative form of the verb differs when it has conjugational endings. The feature that negative form attracts accent disappears when some ending is added. I also showed that the accent of /N/ is different from that of /zu/.

In 2.3.7, I showed that stem vowel alternation of irregular verbs such as *kuru* and *suru* can't be phonologically defined. On the contrary the stem vowel alternation of *juu* can be phonologically defined.

In 2.3.8, accent of verb+particle are treated and I made it clear that there are morphemes that has neither [+predominating] nor [—predominating] feature.

In 2.4, new boundary # is introduced in order to explain the accentual behavior of *tabena—i*, *tabena—katta*, *tabena—ku*, *tabena—kere—ba* which appears in the standardized Okayama dialect.

2.3.6.10 否定形の活用形のアクセント¹⁾

2.3.6.5 のアクセント核牽引のところで動詞の否定形 N のアクセントについて述べたが、〈食べない〉 *tabe'N*, 〈書かない〉 *kaka'N*, 〈捨てない〉 *fiteN*, 〈やらない〉 *jaraN* に対して 〈食べなくて〉, 〈書かなくて〉, 〈捨てなくて〉, 〈やらなくて〉 は *ta'bende*, *ka'kande*, *fite'nde*, *jara'nde* と

なる。また〈食べなかった〉, 〈書かなかった〉, 〈捨てなかった〉, 〈やらなかった〉は ta'benanda, ka'kananda, fite'na'nda, jara'na'nda となる。また, 〈食べなければ〉, 〈書かなければ〉, 〈捨てなければ〉, 〈やらなければ〉は tabe'njaa, kaka'njaa, fite'nja'a, jara'nja'a となる。ここで問題点は三つある。N または njaa が付く場合と nde または nanda が付く場合でアクセント核の牽引のされ方が違うのはなぜか。たとえば〈食べない〉tabe'N ではアクセント核が牽引されているのに, 〈食べなくて〉ta'bende ではアクセント核は牽引されていないのはなぜか。次に無核語幹の動詞に nde, nanda が付いた場合アクセント核はどのようにして現れたのか。また nanda は形態素にどのように分析できるのか。〈食べないで〉, 〈書かないで〉, 〈捨てないで〉, 〈やらしないで〉は ta'bezuni, ka'kazuni, fite'zuni, jara'zuni という形になる。(zu だけが付いた形は用いられないが, 発音してみると zuni が付いたときのアクセントと同じようになり, N が付いた時のアクセントとは異なる。)

		有 核 語 幹		無 核 語 幹	
〈ない〉	N	tabe'N	kaka'N	fite'N	jara'N
〈なくて〉	nde	ta'bende	ka'kande	fite'nde	jara'nde
〈なかった〉	nanda	ta'benanda	ka'kanknda	fite'na'nda	jara'na'nda
〈ないで〉	zuni	ta'bezuni	ka'kazuni	fite'zuni	jara'zuni
?	zu	ta'bezu	ka'kazu	fite'zu	jara'zu
〈なければ〉	njaa	tabe'njaa	kaka'njaa	fite'nja'a	jara'nja'a

有核語幹の動詞に N, nde, nanda が付いた場合のアクセント核は語幹のアクセント核が現れているものと考えられるから, アクセント核の位置の違いはアクセント核牽引が適用されるかされないかということで説明できそうであるが, 無核語幹の動詞に N, nde, nanda が付いた場合のアクセント核は語幹のアクセント核が現れたものとは考えられない。nde は n&de と分析できそうであるから, これはさらに N&de と分析できると思われる。N 自体はアクセント核を持っていないと考えなければならなかったわけであるから, 無核語幹の fite'nde, jara'nde の nde の直前に現れるアクセント核は N ではなくて de が潜在的に持っているものと考えられる。その基底形を /'de/ と考えると N&'de のアクセント核を 'N&de に移動する規則が必要になってくる。この規則は今初めて必要になった規則であるが, 次のように定式化できる²⁹⁾。

(2-48) $VN \& 'CV \rightarrow V'N \& CV$ (アクセント核移動)

ここで重要なことは, 〈ない〉N はアクセント核を牽引する性質を持っている ([+A]) が, 〈なくて〉N&'de 全体はアクセント核を牽引する性質を持っていない ([-A]) ということである。

〈なかった〉nanda を nan&ta と分析するのは問題がないとしても, 共時的にこれ以上どのように分析できるのかよくわからないのでこれ以上は分析しないでおく。ta は ta'beta, ka'ita などの ta と同じものだと考えられるので, それ自体はアクセントを持っていない。したがって na'n の部分が非自己主張型 [-p] のアクセントを持っていると考ええると, 記述はもっとも簡単に

なる。〈ないで〉zumi についても非自己主張型 [-p] のアクセントを 'zumi が持っていると考え
と簡単に記述できる。〈なければ〉の場合は N によってアクセント核牽引が一回適用されている
と考えられる。以下に〈食べる〉と〈捨てる〉の場合について派生を示す。

/tabe&N/	/tabe&N&'de/	/tabe&na'n&ta/	/tabe&'zu&ni/		
[+a][+A]	[+a][-A]	[+a][-p]	[+a][-p]		
ta'be&N	ta'be&N&'de	ta'be&na'n&ta	ta'be&'zu&ni	(2-46)	核牽引
tabe'&N				(2-43)	核付与
	ta'be&N&de	ta'be&nan&ta	ta'be&zu&ni	(2-26)	核消去
				(2-48)	核移動
	ta'be&n&de	ta'be&nan&da			その他
tabe'N	ta'bende	ta'benanda	ta'bezuni		
/fite&N/	/fite&N&'de/	/fite&na'n&ta/	/fite&'zu&ni/		
[-a][+A]	[-a][-A]	[-a][-p]	[-a][-p]		
				(2-43)	核付与
				(2-46)	核牽引
				(2-26)	核消去
	fite'&N&de			(2-48)	核移動
	fite'&n&de	fite&na'n&da			その他
fiteN	fite'nde	fite'na'nda	fite'zuni		
/tabe&N&rja'a/	/fite&N&rja'a/				
[+a][+A][+A]	[-a][+A][+A]				
ta'be&N&rja'a				(2-43)	核付与
tabe'&N&rja'a				(2-46)	核牽引
tabe'&N&rjaa				(2-26)	核消去
tabe'&n&jaa	fite&n&ja'a				その他
tabe'njaa	fitenja'a				

2.3.7 不規則動詞

2.3.7.1 〈来る〉〈する〉

〈来る〉と〈する〉は標準語と同様岡山方言でも不規則である。2.3.1 (「分節音とアクセント (2)」) でこれらの形態はすでに述べたが、ここでもう一度語幹の母音交替のようすについて検討
してみることとする。

	〈来る〉		〈する〉	
終止形	ku'ru	/ku'&ru/	suru	/su&ru/
否定形A	kona'i	/ko&na'&i/	fina'i	/fi&na'&i/
B	ko'N	/ko&'N/	seN	/se&N/
志向形	ko'o	/kV&jo'o/	fo'o	/sV&jo'o/

過去形	ki'ta	/ku' & ta/	fita	/fi & ta/
連用形	kimasu	/ki & mas & ru/	fimasu	/fi & mas & ru/
(「ます」の付く形で代表させる。)				
仮定形 ³⁾	ku'rjaa	/ku' & rja'a/	surja'a	/su & rja'a/
命令形 A	ko'i	/ko' & i/	fi'ro	/i & 'ro/
B	ke'e	/kV & e'e/	se'e	/sV & e'e/
継続相現在	kjo'oru	/kV' =or & ru/	fo'oru	/sV' =or & ru/
継続相過去	kjo'otta	/kV' =or & ta/	fo'otta	/sV' =or & ta/
完了相現在	ki'toru	/ki' & tor & ru/	fito'ru/	/fi & to'r & ru/
完了相過去	ki'totta	/ki' & tor & ta/	fito'tta/	/fi & to'r & ta/
使役形現在	kosase'ru	/ko & sase' & ru/	saseru	/sV & sase & ra/
使役形過去	kosa'seta	/ko & sa'se & ru/	saseta	/sV & sase & ta/
始動相	ki'dasu	/ki' =das & ru/	fi'dasu	/fi' =das & ru/
禁止 A	ku'runa	/ku' & ru & na/	suru'na	/su & ru & 'na/
B	ku'na	/ku' & na/	su'na	/su & 'na/

上の表でアクセントは表層に一番近い位置を示してある。問題になるのは〈来る〉と〈する〉の語幹がどういう母音を持っているかという点にある。上の基底形を示した形のなかで具体的な母音を示したものについては、これ以外には考えられないということを表している。たとえば kona'i の語幹は o という母音を持っていると考えなければ、同化などの一般的な音韻規則によっては説明できない。同様に ki'ta の語幹は i という母音を持っていると考えなければ、同化などの一般的な音韻規則によっては説明できない。ku'ru の u についても同様である。したがって〈来る〉の語幹は少なくとも ko~ki~ku という母音交替をすると考えられる。同様に〈する〉の語幹は少なくとも se~fi~su という母音交替をすると考えられる。

〈来る〉の命令形 B の ke'e の基底形は /ko & e'e/, /ke & e'e/, /k & e'e/ のいずれかでなければならない。このどれであるべきかはすぐには決定できない。〈する〉の命令形 B の se'e も同様に /so & e'e/ か /se & e'e/ か /s & e'e/ という基底形を持っていないなければならない。継続相はすでに述べたように動詞語幹 (Vst) であるから kV の V は i であることが期待されるが、困ったことに /ki' =or/ からは kju'u という形が派生されてしまうので、i では困る。

kjo'oru という形が出てくるためには kV の V は前舌母音でなければならないから、i でなければ e しか残らない。したがって、kjo'oru, kjo'otta の基底形は /ke' =or & ru/, /ke' =or & ta/ であることになる。〈する〉の場合も同じことがいえるので、fo'oru, fo'otta の基底形は /se' =or & ru/, /se' =or & ta/ であることになる。saseru, saseta の語幹は s だけかあるいはゼロであると考えられる。

〈来る〉の志向形 ko'o の基底形 /kV & jo'o/ から ko'o という形が派生されるためには、jo'o の j が消えなければならないが、消えるのは子音語幹であるから、kV の V はゼロでなければならないことになる。〈する〉の志向形 fo'o の基底形 /sV & jo'o/ の V は前舌母音でなければならない

のは当然であるが、i では困る。なぜなら、/ʃi&jo'o/ からは最終的には進行同化が適用されて ʃu'u という形が派生されてしまうからである。しただってVはeでなければならない。

語幹がどの母音をもっているかは音韻条件で決まるのではないが、命令形AとBとでは語幹の母音が違っているし、否定形のAとBとでも語幹の母音が違っていることから明らかなように、意味で決まるのでもない。以上のことをまとめると次のようになる。ただし ke'e は語幹母音として o, se'e は語幹母音として e を持っているものとする。

	〈来る〉		〈する〉	
終止形	ku'ru	/ku'&ru/	suru	/su&ru/
否定形 A	kona'i	/ko&na'i/	ʃina'i	/ʃi&na'i/
B	ko'N	/ko&N/	seN	/se&N/
志向形	ko'o	/k&jo'o/	ʃo'o	/se&jo'o/
過去形	ki'ta	/ki'&ta/	ʃita	/ʃi&ta/
連用形	kimasu	/ki&mas&ru/	ʃimasu	/ʃi&mas&ru/

(「ます」の付く形で代表させる。)

仮定形	ku'rjaa	/ku'&rja'a/	surja'a	/su&rja'a/
命令形 A	ko'i	/ko'&i/	ʃi'ro	/ʃi&'ro/
B	ke'e	/ko&e'e/	se'e	/se&e'e/
継続相現在	kjo'oru	/ke'=or&ru/	ʃo'oru	/se'=or&ru/
継続相過去	kjo'otta	/ke'=or&ta/	ʃo'otta	/se'=or&ta/
完了相現在	ki'toru	/ke'=or&ta/	ʃo'otta	/se'=or&ta/
完了相過去	ki'totta	/ki'&tor&ta/	ʃito'tta	/ʃi&to'r&ta/
使役形現在	kosase'ru	/ko&sase'&ru/	saseru	/s&sase&ra/
使役形過去	kosa'seta	/ko&sa'se&ru/	saseta	/s&sase&ta/
始動相	ki'dasu	/ki'=das&ru/	ʃi'dasu	/ʃi'=das&ru/
禁止 A	ku'runa	/ku'&ru&na/	suru'na	/su&ru&'na/
B	ku'na	/ku'&na/	su'na	/su&'na/

2.3.7.2 言う

〈言う〉は次のような母音交替をする。

		juw を選んだ場合	ʔiw を選んだ場合
終止形	juu	/juw&ru/	/ʔiw&ru/
否定形 A	juwana'i ~ ʔiwana'i	/juw&na&i/	/ʔiw&na&i/
B	juwaN ~ ʔwaN	/juw&N/	/ʔiw&N/
志向形	juo'o ~ ʔio'o	/juw&jo'o/	/ʔiw&jo'o/
過去形	juuta	/juw&ta/	/ʔiw&ta/
連用形	ʔiimasu	/juw&mas&ru/	/ʔiw&mas&ru/

(「ます」の付く形で代表させる。)

仮定形	ʔija'a	/juw&rja'a/	/ʔiw&rja'a/
-----	--------	-------------	-------------

命令形 A		ʔie	/juw & e/	/ʔiw & e/
B		ʔie'e	/juw & e'e/	/ʔiw & e'e/
継続相現在		ʔijo'oru	/juw = o'r & ru/	/ʔiw = o'r & ru/
継続相過去		ʔijo'otta	/juw = o'r & ta/	/ʔiw = o'r & ta/
完了相現在	juuto'ru		/juw & to'r & ru/	/ʔiw & to'r & ru/
完了相過去	juuto'tta		/juw & to'r & ta/	/ʔiw & to'r & ta/
使役形現在	juwaseru ~ ʔiwaseru		/juw & sase & ru/	/ʔiw & sase & ru/
使役形過去	juwaseta ~ ʔiwaseta		/juw & sase & ta/	/ʔiw & sase & ta/
始動相		ʔii'dasu	/juw & das & ru/	/ʔiw & das & ru/
禁止 A	juu'na		/juw & ru & 'na/	/ʔiw & ru & 'na/

問題は基底形として /juw/ を選ぶか /ʔiw/ を選ぶかという点にある。語幹末の w についてはすでに一度 2.3.5 (「分節音とアクセント(2)」) で述べたように ta の前で u になる。また w の後に子音が続くとその子音は脱落する。さらに w は a 以外の母音 (すなわち [-low, V]) の前で脱落する。つまり、すでに述べた (2-28), (2-35) 以外に (2-49) が必要になる。

$$(2-28) \quad \left\{ \begin{array}{c} r \\ s \\ j \end{array} \right\} \rightarrow \phi / C \& _ \quad \text{子音消去}$$

$$(2-35) \quad w \rightarrow u / _ \& C \quad w \text{母音化}$$

$$(2-49) \quad w \rightarrow \phi / _ \left[\begin{array}{c} -\text{low} \\ V \end{array} \right] \quad w \text{消去}$$

語幹にいつ ju が現れ、いつ i が現れるかを観察してみると、i, e, j の前では必ず i が現れ、w が残っているときは ju も i も現れることがわかる。ju しか現れないのは終止形 juu のように最終的に u という母音が直後にあるときか、w 母音化によって w が u になっているときに限られる。表層の o の直前では ju も i も現れる。この関係は〈来る〉や〈する〉の語幹母音交替とは異なって、音韻的な条件で語幹の母音の音価が決まるといえる。/juw/ を基底形に選ぶと i という交替形は次の規則で派生することができる。

$$(2-50) \quad u \rightarrow i / j _ \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \\ j \end{array} \right\}$$

$$(2-51) \quad u \rightarrow i / j _ \left\{ \begin{array}{c} w \\ o \end{array} \right\} \quad (\text{随意適用})$$

$$(2-4) \quad j \rightarrow \phi / _ \left\{ \begin{array}{c} i \\ e \end{array} \right\} \quad j \text{消去}$$

しかし逆に /ʔiw/ を基底形として選ぶと ju という交替形を派生するには次の規則が必要となる。

$$(2-52) \quad i \rightarrow ju / _ \left\{ \begin{array}{c} u \\ C \end{array} \right\}$$

$$(2-53) \quad i \rightarrow ju / _ \left\{ \begin{array}{c} o \\ w \end{array} \right\} \quad (\text{随意適用})$$

なお, i を ju に変えるために i を u に変えるプロセスと u の前に j を添加するプロセスに分けるべき独立の証拠はない. 今述べたどちらのほうが自然かということもちろん最初のほうである. なぜなら (2-50) と (2-52) とを比べてみると明らかなように (2-50) の環境は自然であるのに対し, (2-52) の環境は不自然である. したがって基底形には /juw/ を選ぶべきであることがわかる. 以下派生例を示す. (随意適用されたものとして示す)

/juw & ru/	/juw & N/ juw & a & N	/juw & ta/	/juw & jo'o/	(2-31) a 挿入
juw & u		juu & ta	juw & o'o	(2-28) 子音消去
ju & u			ju & o'o	(2-35) w 母音化
	jiw & a & N		ji & o'o	(2-49) w 消去
	iw & a & N		i & o'o	(2-51)
				(2-4) j 消去
juu	?iwaN	juuta	?io'o ⁴⁾	
/juw & rja'a/	/juw & e'e/	/juw = das & ru/		
		juw & i = das & ru		(2-32) i 挿入
		juw & i' = das & ru		(2-42) 核付与
juw & ja'a		juw & i' = das & u		(2-28) 子音消去
ju & ja'a	ju & e'e	ju & i' = das & u		(2-49) w 消去
ji & ja'a	ji & e'e	ji & i' = das & u		(2-51)
i & ja'a	i & e'e	i & i' = das & u		(2-4) j 消去
?ija'a	?ie'e	?ii'dasu		

2.3.8. 動詞に助詞などが付いたときのアクセント

2.3.8.1 「ながら」

動詞語幹に〈ながら〉が付いたときのアクセントは, 〈食べながら〉 ta'be'nagara, 〈書きながら〉 ka'ki'nagara, 〈捨てながら〉 site'nagara, 〈やりながら〉 jari'nagara のようになる. 有標動詞〈ながら〉が付いたときの第二番めのアクセント核はそれほど顕著ではなく, 実際にはないのと等しいように発音されることもあるが無視するわけにはいかない. このアクセントは 2.3.6.8 (「分節音とアクセント(3)」) で見たようなアクセント, 例えば〈食べていない(継続相現在の否定)〉 ta'bjoora'N のアクセントとも違っている. ta'bjoora'N の場合はアクセントのピークが二回あるのが普通である(したがって二アクセント句)が, ta'be'nagara の場合はアクセントのピークは一回しかない. 厳密にいうとアクセント核が高々一ヶ所現れる範囲をアクセント句と呼ぶわけにはいかないので, アクセントのピークが高々一ヶ所現れる範囲をアクセント句と呼ぶというように修正することにする⁵⁾.

〈ながら〉は /'nagara/ という自己主張型 [+p] でも非自己主張型 [-p] でもないアクセント

を持っているものと考えることができる。

2.3.8.2 「から」

動詞に〈から〉が付いたときのアクセントは、〈食べるから〉tabe'ruka'ra, 〈書くから〉ka'ku-ka'ra, 〈捨てるから〉fiteruka'ra, 〈やるから〉jaruka'ra のようになる。〈から〉が /ka'ra/ というアクセントを持っていると考えると説明できるが、有標動詞に付いたときでも /ka'ra/ のアクセントは消去されないから、このアクセントは自己主張型 [+p] でも非自己主張型 [-p] でもない。tabe'ruka'ra は一アクセント句である⁶⁾。

動詞の「る」「た」形に付く〈らしい〉rafi'i, 〈そうだ〉so'da も同様である。

2.3.8.3 「か」

動詞に〈か〉が付いたときのアクセントは、〈食べるか〉tabe'ruka, 〈書くか〉ka'kuka, 〈捨てるか〉fiteru'ka, 〈やるか〉jaru'ka のようになる。〈か〉が /'ka/ という非自己主張型のアクセントを持っていると考えると説明できる。名詞に〈か〉が付くときも同じである。〈鼻か〉hana'ka, 〈東京か〉tookjoo'ka のようになる。

〈ぞ〉, 〈よ〉, 〈ね〉なども同様である。

2.3.8.4 「そうだ」

動詞語幹に〈そうだ〉が付いたときのアクセントは、〈食べそうだ〉tabeso'oda, 〈書きそうだ〉kakiso'oda, 〈捨てそうだ〉fiteso'oda, 〈やりそうだ〉jariso'oda となる。これは〈そうだ〉の〈そう〉が /so'o/ という自己主張型のアクセントを持っていると考えると説明できる。

2.3.8.5 「のは」, 「のに」, 「ので」, 「とは」等

「の」や「と」のあとにさらに助詞が付いたときのアクセントは「のは」を例に引くと、〈食べるのは〉tabe'runo'wa, 〈書くのは〉ka'kuno'wa, 〈捨てるのは〉fiteruno'wa, 〈やるのは〉jaruno'wa のようになる。〈のは〉を一語と考えると /no'wa/ というアクセントを持っているとしておけば説明できるが、〈のは〉が二語であると考えれば、〈は〉はアクセント核を持っていないので、〈の〉が /no'/ というアクセント核を持っていないなければならないことになる。なお〈のもの〉の場合〈も〉が /'mo/ というアクセント核を持っているから問題はない。〈鼻の穴〉hanano ana における〈の〉と〈捨てるのは〉fiteruno'wa の〈の〉とが別の語であると考えれば、上のように考えても問題は生じない。しかし一音節の助詞が二つ並んだときは最初の助詞の後にアクセント核が現れるという表現で説明することもできそうである。

2.4 境 界

アクセントのピークが高々一ヶ所現れる範囲をアクセント句と呼び、アクセント句の境界として%を用いた。この境界が必要なもう一つの場合について述べることにする。

形容詞の否定形に活用語尾が付くとアクセントは次のようになる。〈赤い〉の例を挙げる。

終止形	ʔa'koone'e	/ʔa'ka & u%na'& i/
-----	------------	--------------------

志向形	ʔa'koonakaro'o	/ʔa'ka&u%na'&kar&jo'o/
過去形	ʔa'koona'katta	/ʔa'ka&u%na'&kar&ta/
連用形	ʔa'koono'o	/ʔa'ka&u%na'&u/
仮定形	ʔa'koona'kerja'a ⁷⁾	/ʔa'ka&u%na'&ker&rja'a/

明らかに na の直前にアクセント句境界があると考えられる。一方、動詞に〈たい〉が付いた場合は次のようになる。

終止形	tabete'e	/ta'be&ta'&i/
志向形	tabetakaro'o	/ta'be&ta'&kar&jo'o/
過去形	tabe'takatta	/ta'be&ta'&kar&ta/
連用形	tabe'too	/ta'be&ta'&u/
仮定形	tabe'takerja'a	/ta'be&ta'&ker&rja'a/

この場合は ta'ba&ta' 全体が形容詞と同じように機能していると思われる。つまり、動詞語幹と〈たい〉の間にある形態素境界は実際にはないものと同じように扱われることになる。しかし動詞の否定形の活用は次のようになる。

岡山標準語

終止形	tabena'i	/ta'be#na'&i/	*tabene'e
過去形	tabena'katta	/ta'be#na'&kar&ta/	
連用形	tabena'ku	/ta'be#na'&u/	*tabeno'o
仮定形	tabena'kere'ba	/ta'be#na'&ker&re'ba/	*tabena'kerjaa

岡山方言

終止形	tabe'n	/ta'be&n/
過去形	ta'benanda	/ta'be&na'n&ta/
連用形	ta'bende	/ta'be&n&'de/
	ta'bezuni	/ta'be&'zuni/
仮定形	tabe'njaa	/ta'be&n&rja'a/

岡山方言の場合についてはすでに述べたので、ここでは岡山標準語についてだけ述べる。動詞の語幹に〈たい〉が付いた場合と〈ない〉が付いた場合とでは過去形、連用形、仮定形のアクセントが違っている。この違いを説明するには〈ない〉が付いた場合は、それより前にある要素を全く無視してアクセント核の位置が決まると考えればよい。そのためには〈たい〉の前にある境界と〈ない〉の前にある境界とは性質が別のものであると考えなければならない。〈たい〉の前の境界として通常の形態素境界 & を用いた以上、〈ない〉の前にはこれとは別の境界を必要とする。上の基底形で # を用いたのはそのためである。

形容詞に付く〈ない〉と動詞に付く〈ない〉とは別のものであると考えられる。なぜなら、/ʔa'ka&u%na'&i/ の na'&i は ne'e になりうるけれども、/ta'be#na'&i/ の na'&i は ne'e にはならないからである。同様に /ʔa'ka&u%na'&u/ の na'&u は no'o になりうるけれども、

/ta'be#na'&u/ の na'&u は no' にならない. na' の後に付く仮定形の形態素も形容詞の場合は rjaa となりうるが、動詞の場合は rjaa とはならない.

(注)

- 1) 標準語の〈なく〉〈なくて〉〈ないで〉は岡山方言の〈ように〉〈ずに〉〈んで〉に大体対応する. 〈ないで ください〉は岡山方言でも 〈ないで 下さい〉であるがまったく別の形 rarena もある.

標準語	岡山方言
行かなく (なる)	?ikanjo'oni (naru)
行かなくてもいい	?ika'ndemo ?e'e
行かないで, (家にいた)	?ika'zuni (?ie'e ?otta)
行かないで下さい	?ikana'ide kudasa'i
	?ikare'na

形容詞に 〈なく〉〈なくて〉が付く場合は、岡山方言では次のようになる.

赤くなる	?a'koono'o naru
赤くなくてもいい	?a'koono'otemo ?e'e

- 2) 岡山方言はモーラ計算のモーラ言語であると考えられるが、特殊拍の後に一モーラしかないとき、その特殊拍にアクセント核があるのは特殊の事情があるときに限られる. 「岡山方言における特殊拍とアクセント」(『音声言語研究 I』に掲載予定を) 参照.
- 3) 〈来れば〉〈すれば〉は岡山方言では ku'rjaa, surja'a であるが、標準語との対応関係は少し複雑である.

標準語	岡山方言		
1 来ればいいのに	ku'rjaa ?e'e noni	/ku'	&re'ba%jo' &i noni/
2 *来ればしない	ku'rjaa sen	/ku'	&re'ba se&N/
3 来はしない	kja'a sen	/ki'	&a se&N/
1 すればいいのに	surja'a ?e'e noni	/su	&reba%jo' &i noni/
2 *すればしない	surja'a sen	/su	&re'ba se&N/
3 しはしない	ja'a sen	/ji	&a se&N/
1 食べればいいのに	tabe'rjaa ?e'e noni	/ta'be	&re'ba%jo'&i noni/
2 *食べればしない	tabe'rjaa sen	/ta'be	&re'ba se&N/
3 食べはしない	ta'bjaa sen	/ta'be	&a se&N/
1 書けがいいのに	ka'kjaa ?e'e noni	/ka'k	&re'ba %jo' &inoni/
2 *書けばしない	ka'kjaa sen	/ka'k	&re'ba se&N/
3 書きはしない	ka'kjaa sen	/ka'k&i	&a se&N/
1 捨てればいいのに	fiterja'a ?e'e noni	/fite	&re'ba %jo' &i noni/
2 *捨てればしない	fiterja'a sen	/fite	&re'ba se&N/
3 捨てはしない	fitja'a sen	/fite	&a se&N/
1 やればいいのに	jarja'a ?e'e noni	/jar	&re'ba %jo' &i noni/
2 *やればしない	jarja'a sen	/jar	&re'ba se&N/
3 やりはしない	jarja'a sen	/jar &i	&a se&N/

標準語では2の言い方はできないけれども、岡山方言ではできる. 岡山方言における2と3の違いはよくわからないが、年齢による違いがあると考えられる. 比較的年輩の人は3のスタイルを好んで使う傾向があるようである. 私自身は標準語の3に対応する言い方として岡山方言の2のスタイルを用いる. 岡山方言の2と3の区別は子音語幹動詞の場合は中和する.

- 4) i の前にある ? をどのようにして派生するかという問題があるが、一つの考えかたとして、 $\phi \rightarrow ? / \# _ V$ という規則で導入することができることを示しておくに留める。
- 5) アクセントのタイプをまとめると次のようになる。

一 アクセント 句			二アクセント句
自己主張型 (2-26)	非自己主張型 (2-47)	自己主張型でも 非自己主張型で もない型	
tabjo'o tabeso'oda	ta'bjooru ta'betoru tabe'rjaa	ta'be'nagara tabe'rujo'ri tabe'ruso'oda	ta'bjoora'n ta'betora'n

- 6) 名詞に付く〈から〉は /kara/ というアクセントを持っていない形をしている。というのは、平板式の語に付くときは〈鼻から〉hanakara, 〈東京から〉tookjookara のようになるからである。

名詞に付く助詞と動詞に付く助詞とが分節音の面では同じでも意味及びアクセントの面での違いがある例としては、〈と〉がある。

名詞＋と

〈花と〉 hana'to /hana'&to/

〈鼻と〉 hanato /hana&to/

動詞＋と

〈食べると〉 tabe'ruto /ta'be&ru&'to/

〈捨てると〉 fiteru'to /fite&ru&'to/

名詞に付く〈と〉は /to/ であるが、動詞に付く〈と〉は /'to/ という【一自己主張】のアクセントを持っている。

- 7) 仮定形 /rja'a/ は動詞に付いたときは ta'berjaa, ka'kjaa のようであるが、形容詞に付いたときは ?a'kakerja'a, fi'rokerja'a のようになる。〈たければ〉, 〈なければ〉の場合も同様に tabe'takerja'a, tabena'kere'ba のようになる。「分節音とアクセント(2)」で述べた ?a'kakerjaa, ko'ikerjaa, fi'rokerjaa, ?u'sukerjaa は ?a'kakerja'a, fi'rokerja'a, ko'ikerja'a, ?u'sukerja'a に訂正しなければならない。

1985年6月17日